## 公益社団法人石見大田法人会 会報『天領』第65号(2019年)



温泉津温泉街を歩くと朱色の格子のぼんぼりが 目に付く。「あさまし あさまし あさましいの もうその皮」。妙好人、浅原才市さんが残した多 くの詩が書かれている。

27年前、温泉津町商工会青年部が温泉街を少しでも華やかにと制作した。青年部の一人のアイデアで、事前に安楽寺のご住職をはじめ地域内のご住職さん方に相談し許可をもらい協力していただきました。

当時の温泉津町には商店が多く、青年部も40歳 までの正会員が30人いました。

作業は、細いプラスチックの角棒を仕入れ寸法 に合わせて切断、縦の骨は2本を接着剤で重ね頑 丈にし、その棒に溝を削り、塗装をし、最後にポ リ系の板を差し込み組み立てました。作業は簡単 ではなく、夜、青年部員の工房などに集まり2か 月余りかかりました。

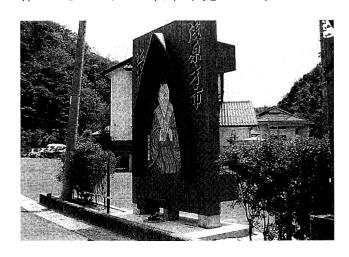
詩と各お店や旅館の宣伝を敬願寺の鷺谷良子さんに書いていただいた。金物はいつまでも錆びずに、きれいでなくてはと、小林太君に頼み、小林造船所でステンレスを加工してもらいました。

あらかじめ商店や旅館にぼんぼりを付けていた だくようお願いをして回り、協力していただいた お店や旅館からは、製作費の一部をお願いし、各 1万円を支出していただいたと思います。10年たち、20年たちもうすぐ30年。こんなに長く壊れないで持ってくれてうれしく思っています。

ぼんぼりをつくって2年後、国道9号の交差点、 ふれあい館の駐車場の隅に下駄の看板を作りました。 裏面に観光地図を描くことで、温泉津町から 制作費の半分を負担してもらいました。

表面は才市さんが下駄職人であったことから下 駄の模様に才市さんの紹介文章と才市像を描きま した。照明設備もつけ、夜は看板がよく見えるよ うしました。

残念なことに何年か前、無理にバックしたバス に、裏の下駄の歯を壊されました。いつか修理を しようと思っていましたが、撤去されていました。 作ったものとしては本当に残念でした。



## 妙好人浅原才市とは

妙好人とは、浄土真宗の熱心な信者に送られた 尊称であり、浅原才市は1850年温泉津に生まれ 1932年(昭和7年)に83歳で亡くなっている。才 市の父、要四郎は若いとき、師匠寺・温泉津町井 田の涅槃寺(現在は江津市に移転)の役僧となり 法名を西教といった。

才市は11歳の時、親類の大家屋へ舟大工の弟子 として引き取られ養育され、25歳で結婚。55歳ご ろ下駄職人となったそうです。



才市が45歳のとき、父が82歳でなくか82歳でなくなりました。父の死後、「親の協」を才市の求道の念は激しく燃え、60歳を過ぎた頃から彼の心は次第に明るく開け、仏様のるく開け、仏様の

まことの心が自分に働きかけ、そして自分を包んでくださるという感動が自然に「南無阿弥陀仏」とともに「口あい」となって口からあふれ出るようになりました。

それをカンナ屑や下駄の歯切れに書きとめて、 何度も読み返し味わって「お念仏」を喜んだそう です。

その一生は、才市自身の言葉通り「帳面つける も南無阿弥陀仏」「御恩うれしや南無阿弥陀仏」 の生活であった。

のちにすすめられて「口あい」をノートに清書 し、そのノートは70冊にもなり、歌われた詩は1 万首に及んだ。

才市の日常生活は、実に平凡な目立たないもので、ただよく、安楽寺をはじめ多くのお寺にお参りをしたようです。

才市の詩を読むとその信仰は例えようもなく深く、浄土真宗の信心の極致を示しているという。 まさに鈴木大拙博士が絶賛され「日本的霊性」そ のものであるといわれています。



「かぜをひけば せきがでる さいちが ごほうぎのかぜをひいた ねんぶつのせきが でる でる」

このような素晴らしい詩を残しています。

71歳の時、才市の頭に角のある肖像画を描いて ほしいと頼み、画家、若林春暁に書いてもらい、 漢詩の文を、安楽寺住職・謙敬勸学様に書いても

らったそうです。

平成12年には、 才市生誕150年記 念顕彰法要が多く の方々と共に行わ れました。

安楽寺には、才 市の残した遺品館 があります。また、 「伝記」「詩集」な どの出版物もあり



ます。駅通り中ほどにも才市に関係した展示物が あります。

※ 浅原才市さんについては、安楽寺住職、梅田淳 敬さんより資料をいただきました。